

事例10:施設へ入所しても家族と共に自分らしく生きる～最期まで家族と共に歩む施設生活～

発表テーマ:認知症高齢者ケア／利用者ニーズ／利用者家族ニーズ／利用者生き生き支援

事業所名:恵泉第2特別養護老人ホーム

担当者:生活相談員 黒田 雅人

施設・事業所紹介

平成 12 年に認知症専門の特別養護老人ホームとして開設。（入所:80 名・ショートステイ:20 名）



【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

利用者 A 様の当施設への相談のきっかけは、自宅で生活している中で、アルツハイマー型認知症の発症と共に、お酒の量も増加、家族に対して、暴言、暴力、希死念慮が続き、家族も対応に疲弊されての相談でした。

令和3年に精神科病院に入院加療し、内服治療により、飲酒欲求、希死念慮は消失。易怒性の表出もあったが、徐々に軽減傾向が見られるようになりました。A 様は情緒安定が図れ、退院できる状況でしたが、奥様に対して強くあたる一面があり、高齢の奥様では在宅復帰は困難な状況でした。

家族より施設入所を希望され、令和3年4月より当施設の利用を開始。施設入所も当初は介護拒否、暴言、暴力行為は見られ、職員も対応に苦慮する場面もありましたが、徐々に本人の表情も軟化されました。職員も本人に対して、声掛けの仕方を工夫しながら個別性に合わせたケアを試行錯誤しながら行いました。家族の定期的な面会、協力、オヤツの差し入れなどの温かな協力もあり、穏やかな生活が送れるようになりました。しかし、施設生活が続く中で、心身共に衰えもあり、徐々に入退院を繰り返すようになりました。

令和5年 1 月初旬より、食事を拒否することも見られるようになり、食事量の低下、栄養状態の悪化が懸念されるようになりました。これを受けて、主治医、家族とのムンテラで、施設で看取り対応の方向性となりました。

その後も食事量低下が顕著に見られ、いよいよ人生の最期が見えてきた状況となりました。兼ねてから、自宅に帰りたいと希望がありましたが、精神科病院入院以来、コロナ禍の影響もあり、一時帰宅が難しい状況でした。

このまま施設で最期を迎えるのは、本人にとっても家族にとっても後悔が残るのではないか、まだ体力があるうちに、少しの時間でも自宅に帰らせてあげることが出来ないか、と

いう提案が職員間での話し合いの中で挙がりました。家族にも提案と共に一時帰宅に対しての想いを確認し、「ぜひお願いしたい」となりましたので、同年1月中旬に自宅へ一時帰宅されました。

2 具体的な取組内容

令和5年1月中旬、昼に一時帰宅援助。自宅まで施設車で送迎したところ、たくさんの家族が出迎えて下さりました。

自宅の門をくぐり抜けて、車椅子のまま自宅へ入りました。玄関を抜け、リビングへ行き、いつも座っていた馴染みの席に車椅子をとめ、長女様、奥様の手料理を少し口にして、大好きだったチョコレートや日本酒を飲まれました。本人からは言葉を発する体力はないものの、家族との温かな会話の中で、本人の表情もリラックスしたものとなっていました。昔よく聞いていた軍歌を聞き、愛犬と戯れられ、穏やかな時間が過ぎていきました。1時間程の滞在時間を終え、施設に帰りました。その5日後に老衰でお亡くなりになりました。



3 成果と評価

家族、本人の念願かなって自宅に一時帰宅。家族との穏やかな一時を過ごして頂きました。施設としても、コロナ禍で外出が難しい状況の中、看取りケアについての方向性の広がりが実感できた事例でした。

家族からも、「温かな時間を家族と一緒に過ごす事が出来、感謝しかありません。あの時間があったからこそ、送り出した、私たちは今も温かな気持ちでいられます」とお礼の手紙を頂くことができました。

4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

コロナ禍で外出が難しい状況の中でありましたが、家族の本人への想いや協力があり、そこに職員の想いが加わり、看取り期の自宅への一時帰宅が出来ました。自宅で食事をされることもあり、念のため携帯型の吸引機を持っていきました。

看取り期以外でも、このような機会をもつことは、本人にとっても、家族にとっても互いの「帰らせてあげたい」という、ニーズが重なるようであれば、自己実現となる取組になると思います。

事例11:ノーリフト革命！～サヨナラ腰痛～

発表テーマ:職員生き生き支援

事業所名:恵泉第3 特別養護老人ホーム

担当者:介護フロアリーダー 池田朱里、介護フロアリーダー 宮内いく美

施設・事業所紹介

平成 19 年 4 月開設。全室個室。入居者数 80 名。「ユニット型」という全室個室で、その方お一人お一人の空間を大切にしています。自宅で使用されていた家具や思い出の品物込むことができ、これまでの生活をそのまま継続して暮らすことができます。



【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

当施設では、腰痛による離職や休職する職員が多く、職員が継続して働きやすい職場環境を作っていくために、腰痛の改善・ケアの産業化・人材確保・育成を進めることが必要でした。

2 具体的な取組内容

2017 年	ノーリフトケアの研修に参加。『持ち上げない介護』の知識と技術の全職員への伝達を行うためのチームプロジェクト発足。
2018 年	介護リフト 6 台、移乗用ベルト 4 個、スライディングボード 8 枚、スライディングシート 8 枚を導入。チームプロジェクトメンバーがリフトリーダー研修に参加し福祉用具の使用方法を学び、全職員に周知。
2021 年	乗せかえくん 4 枚導入、ハーティグローブを常勤職員に配布。
2023 年	腰痛予防チーム発足。毎日腰痛体操を実施。以降も定期的な福祉用具の勉強会や研修に参加。

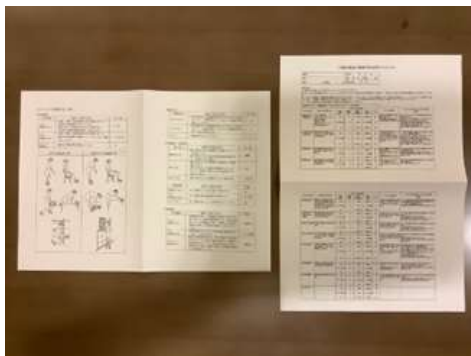


3 成果と評価

介護作業者の腰痛予防対策チェックを年に 2 度実施しています。プロジェクトチームのノーリフトの考え方や『(職員が)持ち上げない介護』の実践は定着し、職員の腰痛に対する意識が高まり、腰痛による退職者や休職者、欠勤する職員は確実に減少しました。

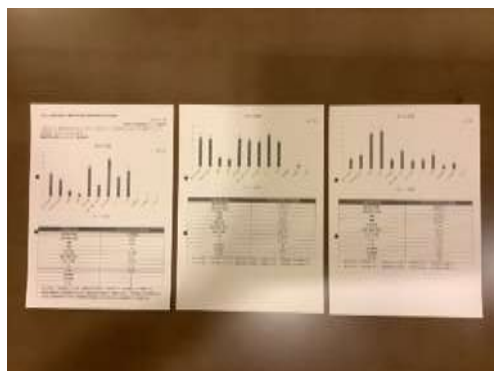
以前は離床が困難だった入居者もリフト導入により車椅子への移乗が安全に行えるようになり、今では自発的に「起きたい」と希望される声も聞かれ QOL の向上にも繋がっています。

走行式リフト使用者は 26 名、それぞれの生活場面によって福祉用具を使い分けています。



4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

福祉用具導入により職員の腰痛は軽減されています。今後も介護ロボットの活用や ICT 化を推進していくために、ケアの産業革命に施設全体で取り組んで行く予定です。今後、予測型見守りシステム Neos-Care を 12 台導入予定です。



【参考資料など】

- リフトリーダー養成研修テキスト
- セーフティケアの介護・看護

事例12:健康体操

発表テーマ:健康維持など／自立支援

事業所名:ケアハウス恵泉・第2ケアハウス恵泉

担当者:生活相談員 平野 彰吾、生活相談員 西村 章吾

施設・事業所紹介

老人福祉法で定められた軽費老人ホームのひとつであり、定員はケアハウス恵泉が 82 名、第 2 ケアハウス恵泉が 100 名となっています。利用料の一部は入居者の収入に応じて市から補助があるため、低額でご利用いただけるのが特色です。

対象者は身体機能の低下により自宅で自炊することが負担になってきたなど、加齢に伴い自宅での生活に不安を感じるようになってきた方を対象としており、年齢は原則 60 歳以上の方となります。要介護認定を受けていなくても入居可能です。

サービス内容は、食事の提供、入浴等の準備、生活相談、緊急時の対応、生きがい支援、介護・医療サービスの連絡調整など。

要支援、要介護認定をお持ちの方は、訪問介護やデイサービスなどの介護保険サービスを利用することができます。

明石恵泉福祉会は、総合福祉施設です。クリニック(医療)やリハビリをはじめとした、たくさんのサービスが法人内にあり、総合的な支援体制が整っていることが魅力です。もし、ケアハウスで自立した生活が困難となっても、状態に応じて、介護老人保健施設、グループホーム、特別養護老人ホームなどをご紹介します。

【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

入居者について、居室で 1 人過ごす時間が多く、運動不足、他者交流が少ないことで生活意欲が低下してしまうことが課題としてあります。運動するには、「食事」が重要と考えており、「栄養」管理をするため、食事摂取量の計量も毎月実施しています。

自ら積極的に活動する入居者もおりますが、少数派であり、「あきらめ」の声をよく耳にするのが現状です。「単に運動したらいい」という考え方ではなく、自助努力のみに頼らない環境因子を適切に調整することで、入居者一人一人の Well-being(健康)の維持向上を目指したいと考えました。その目的を実現する一つの手段として、健康体操を実施することとなりました。

2 具体的な取組内容

健康体操プログラムについて、施設職員が見本となり、週に 1 度、入居者と一緒に体操する機会を設けている。また、健康体操カードを作成しており、参加すれば、職員がシールを貼り、モチベーション維持につながるよう努めています。プログラム内容は、入居者全員に配布しており、「居室でもできる」内容となっています。



3 成果と評価

健康体操の実施状況について、「居室で行っている」または「居室で時々行っている」と回答した入居者は全体の9割程度でした。週に1度の集まる機会には全体の約3割程度の入居者が参加し、体操を実施しています。

居室で取り組む入居者の中には、「足の筋力が弱っているから」「最近よくフラフラするから」と話す方が多く、下肢筋力の維持・向上を目的とし、体操に取り組んでいることが分かりました。また、集まる機会に参加する入居者からは、「みんなで笑ってできるのが良い」「1人だったらやる気が出ないけど、みんなとだったら頑張れる」という声があり、他者交流を求めるコミュニティの存在は重要であると感じました。

これらのことから、「健康体操」することの意味や価値は、入居者一人ひとりによって異なるということに改めて気づきました。体操することについて「入居者本人はどう思っているのか？」を都度確認し、アセスメントするなかで、今後も、well-being(健康)を追求していきたいと考えています。

4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

入居者一人一人のWell-being(健康)を追求することは、そう簡単ではありません。職員の細かなアセスメントのなかで、チームで支援していく必要性を感じています。

ケアハウス(自立型)には、ケアマネ、看護師がおらず、日々関わるのは介護職員、相談員、施設長がほとんどです。ケアマネジメントの中軸を担うケアマネとの協働はもちろん、医療的な側面を担う看護師との協働を図るため、ケアハウス職員としては、入居者の小さな変化に気づき、情報を提供することに力を入れています、十分でないと考えています。

そもそも「入居者にとっての Well-being(健康)な生活って何だろう？」がチームで共有できておらず、各事業所が「点」と「点」になって支援していると感じます。「線」を作り、同じ方向に向かって支援できるチーム形成を目指したいです。

【参考資料など】

フレイル健康予防体操

～タオルを使ってのびのび体操～

大きく動かし、全身をほぐす体操です

深呼吸しながら、ゆっくりと動かしましょう！

縦まわし 左右 20回
肘を肩にゆっくり回します

横ひねり 左右 20回
上半身を横にゆっくり回します

横たおしと足ふみ 左右 10回
肩幅へ身体を倒し
戻して足踏み5回



10月

日 Sun	月 Mon	火 Tue	水 Wed	木 Thu	金 Fri	土 Sat
25	26	27	28	29	30	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	1	2	★今月の体重 Kg		

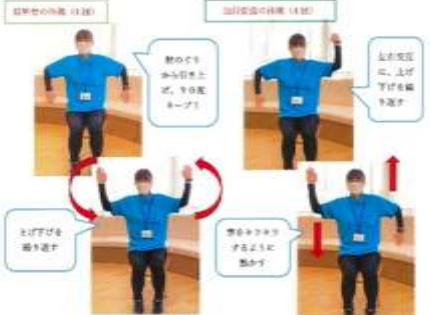
2022

フレイル健康予防体操

肘を固定して、手を上下動かす事で、肩甲骨の内側の
帯内にアプローチし、掌を握る事により、血行促進に！

肘固定の体操 (11回)

加肩運動の体操 (14回)



2023 1月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	1	2	★今月の体重 Kg	

2023